

Rotary



# 白河西ロータリークラブ

SHIRAKAWA WEST ROTARY CLUB

創立 1986 年

2022~2023年度クラブ目標

『想像しよう、未来のロータリー  
創造しよう、これからのクラブ』



イマジン  
ロータリー

会長 高 畠 裕  
幹事 車 田 裕 介



2022-23年度国際ロータリーテーマ

## 第1745回例会

令和5年2月2日(18:30~19:30)

○ソング

- 君が代
- 我等の生業

○ビジター

白河市長 鈴木和夫様、長 克則様

○スマイルBOX

- 高畠裕会長 (先週の白一小、白二小の音楽の奉仕事業に参加頂いた皆様ありがとうございました。長克則様ようこそ。一緒にロータリーを楽しみましょう。)
- 車田裕介幹事 (本日は白河市長鈴木和夫様、新年例会への御出席誠にありがとうございました。又、ゲストの長様、御参加ありがとうございました。本年度も残り半分を切りました。何卒よろしく願いいたします。)
- 山口治会員 (結婚祝いありがとうございます。2月7日ですので楽しみにしております。スマイルを出す回数が少ない人なので、今回はまとめて出したいと思います。)
- 鈴木孝幸会員 (本日は新年会へ白河市長様、長板金の長社長様、参加ありがとうございました。先日、12日には新米山功労者表彰、ありがとうございました。ちょっと欠席が続きまして、多めにスマイルいたします。)
- 青木大会員 (2月27日で50歳になります。人生折り返しと思って健康に注意していきます。お祝いありがとうございます。)
- 永野文雄会員 (鈴木市長様、御来訪ありがとうございます。毎日ご苦労様です。長さん、入会を期待してます。)
- 金田昇会員 (本日は鈴木市長をお迎えしての新年会を楽しみにしておりました。鈴木市長様、今年もよろしく願いします。)
- 関谷亮一会員 (鈴木和夫白河市長様、ようこそおいでくださいました。卓話ありがとうございました。長克則様、入会よろしく願いいたします。)
- 居川孝男会員 (鈴木白河市長様、本日はお忙しい中白河西RCでの卓話ありがとうございました。お体にはお気を付けて市政発展の為よろしく願いします。)
- 鶴丸彰紀会員 (鈴木市長、たくさん参考になるお話をありがとうございました。新入会員の長様、今後ともよろしく願いいたします。楽しくいきいましょう。)
- 運天直人会員 (鈴木市長、ゲストの長様、ようこそ西クラブへ。明日は節分です。今年の皆様の健康を祈念してスマイルいたします。)

### ▶第1745回例会出席状況 (R5年2月2日)

Ⓐ 出席免除を受けていない正会員数	51名
Ⓑ 出席免除の適用正会員数	14名
Ⓓ 全正会員数	65名
Ⓒ ①の出席者数	30名
Ⓔ ①のメイクアップ者数	0名
Ⓕ ②の出席者数	10名
Ⓖ = ③ + ④ + ⑤ (メイクアップ補填後の出席会員数)	40名
Ⓗ = ⑥ - (⑦ - ⑧)	61
Ⓘ = ⑥ / ⑨ × 100 (例会出席率)	65.6%



白河市長 鈴木和夫様ご来訪

▶例会日: 第1・第3木曜日(12:30) その他の木曜日(18:30~19:30)

▶例会場: 白河市新白河駅前 東京第一ホテル新白河

▶事務局: 〒961-0957 福島県白河市道場小路96-5 (白河商工会議所内) ☎23-3101 FAX22-1300

## 本日のプログラム

### ■会長の時間



高島裕会長

皆さん、こんばんは。本日は、白河西ロータリークラブの新年会ということでプログラムを決定させていただいております。例年の三クラブ合同新年会がないぶん、今日はクラブの新年会で皆さんと一緒に新年をお祝いしたいと考えております。まず初めに、お客様をご紹介しますと思います。「長板金」さんの代表取締役であります長克則様でございます。長様には後程、簡単に自己紹介をいただこうかなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。先週、白河の文化交流館「コミネス」におきまして、白河西ロータリープレゼンツの白一小、白二小の子供たちに「コミネス」ということで、奉仕活動をさせていただきました。一小の児童も二小の児童も本当に大変喜んでいただいております。一番喜んでいただいたのはなんだかんだいって保護者の方だったのかなというふうに感じております。やはり、子供たちに我々が尽くすことが保護者、そして地域のためになるということが改めて感じました。また、その前に行われました食育事業。この食育事業におきましても、後日私のほうで子供たちにアンケートを取らせていただきました。その中で10個くらいの項目があったんですが、ロータリークラブという言葉を知ったことありますかという質問。そして、将来的に皆さんも誰かの役に立ちたいと思いませんかという質問があったんですが、ロータリークラブを知ってるかどうかという質問に関しては約9割の子供が知らないというふうな答えでございました。これもまあ、我々にとって新たな課題なのかなと感じております。また嬉しいことに、将来的に人の為に役に立ちたいという子供がほぼこちらは逆に9割くらいの子供がいたということも現実答えとして出ておりました。我々が子供たちに何かを与えるということも奉仕の一つかもしれませんが、教えるということも奉仕の一つなのかなというふうには感じるところであります。今後とも、西ロータリー、そして自分の会社を通じて地域の為、そして子供たちの為に何かを伝えていける発信していけるようなそんな存在、そしてそんな団体であれたらいいのかなと感じております。今後とも皆様、どうぞよろしくお願い致します。また、その「コミネス」においてあった中で私自身が勉強させられる部分がありました。終わってからその日、夜参加したメンバーで懇親会行ったんですが、会長ちょっと話の時、緊張してて顔あっちこっち向き過ぎじゃないとか、語りかけるように話したほうがいいんじゃないかなんていうお話をいただきましたので、今後そういった場ではその辺を心にしながらということで、役職は人を育てるとよく言いますが、本当にこの一年間で私がどのくらい成長できるか。そして皆さんのためにどのくらいお役に立てるかということも含めて、勉強していく一年に出来るのかなと思っておりました。今日は、月初めということでプログラムもありますし、その後白河市長の講和もございまして、会長の時間も今日は早めに切り上げたいと思っておりますので、今日の会長の時間はこの辺にさせていただきますと思います。本日、どうぞよろしくお願い致します。

### ■株式会社長板金 代表取締役 長克則様



皆様、こんばんは。初めまして。わたくし白河の関与のほうで建築板金業を営んでおります、長克則と申します。今日、一応会員になる決意をしてこの場に次第であります。白河の地に私も来まして、今年でやっと10年を迎えることができました。この白河の地で私も育てていただいたという感謝の気持ちで今はおります。ですので、これからはこの白河の地に根付いた仕事と、皆様の地域に根付いた仕事ができるように頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞ皆様よろしくお願い致します。

### ■幹事報告

車田裕介幹事

- ふくしま運動推進協議会 県南地域協議会会長 山下勝弘：ふくしま運動推進協議会 県南地域協議会 臨時総会について
- ふくしま運動推進協議会 県南地域協議会会長 山下勝弘：清掃活動事業に係る資材の購入について（照会）
- 県南分区ガバナー補佐 郡部仁喜、須賀川ぼたんRC会長 水上哲夫：インターシティーミーティング参加のお願い
- 県南分区ガバナー補佐 郡部仁喜、須賀川ぼたんRC会長 水上哲夫：新入会員セミナー参加登録のお願い
- 県南分区ガバナー補佐 郡部仁喜：第4回会長幹事会ランチミーティング
- 右近ガバナーエレクト事務所：MY ROTRY次年度役員登録について
- 右近ガバナーエレクト事務所：MY ROTRY次年度事務局登録について
- 日本事務局財団室：財団NEWS 2023年2月号
- ガバナー 佐藤正道、RYLA委員会委員長 佐藤美奈子：国際ロータリー第2530地区2022-23年度「第41回RYLA研修会」への参加について
- ガバナー 佐藤正道、次期研修リーダー 芳賀裕：会長エレクト地区研修会セミナー（RETS）開催のご案内
- ガバナー 佐藤正道、担当相談役 志賀利彦：国際ロータリー第2530地区委員会DEI委員会セミナー（DEIロータリー）開催のご案内
- 日本事務局 業務推進・IT室：平和構築と紛争予防月間リソースのご案内

### ■委員会報告

#### ○親睦委員会

大住由香里委員長

#### 【結婚記念日】

山口治会員、鈴木典雄会員

#### 【誕生日のお祝い】

佐藤清作会員、渡部則也会員、齋藤孝弘会員、青木大会員



## ○雑誌広報委員会

## 前原俊治副委員長



雑誌広報委員会の前原です。2月の「ロータリーの友」の記事のご紹介をしたいと思います。この後、予定がいっぱいあるということなので、簡潔にご説明をしたいと思います。横組みの6ページと7ページ。2月23日は、ロータリーの創立記念日ということでございます。そういうことで、7ページに一応ロータリーは何ぞやということいろいろ書いてあります。皆さんもういろいろご存じかと思いますが、もう一度この辺の記事を読んでいただいで、ロータリーの認識というか知識を深めていただければと思います。続きまして、横組みの24ページから27ページに渡って「ガバナーのロータリー・モメント」ということで、各地区のガバナーの方からの投稿が載っております。特に25ページは当2530地区の佐藤ガバナーからの投稿が載っております。是非、皆さんで読んでいただければと思います。その他にもいろいろ記事が載っておりますので、皆さん一読していただければというふうに思います。

## ○国際奉仕委員会

## 諸橋和典委員長



皆さん、こんばんは。国際奉仕委員会担当の諸橋です。来週はウクライナ情勢を知ろうということで、白河に住むウクライナの方に来てもらうのと、あとウクライナのロータリーの方とちょっとフェイスブックで繋がってお願いしたら出てくれるということなので、ズームで参加してもらおう予定です。相手は英語が喋れるんですけどもこちらがちょっとできなくて、通訳を呼ぶか場合によっては今スマホで通訳が出来るものがあるので、それでやってみようかと思っています。いろいろと技術的に難しい部分あるんですけども、取りあえずやってみようと思いますので、是非参加お願いしたいと思います。よろしく願います。

## ■3分間スピーチ

## ○成井正之会員



皆さん、こんばんは。いきなりの振りで何を喋ろうかなと思うんですけども、今サッシ業界は熱いです。というのは、CO2削減のために国が目標値を達成できないために窓を断熱しようということで、非常に凄い予算が付いております。全体で2,800億という、今までかつてないようなサッシで断熱カイコウをやってくださいということで、100%定価の大体4割位はうち引いて売ってたんなんです、そのところから尚且つ約半分予算が付きました、100万の仕事だったら30万で出来てしまうと。その代わりいろんな規制がありまして、断熱係数をあげてくださいということなんですね。そういった予算ができて、私も今年は前半戦に多く取り入れてやろうと思っています。チラシも一応作りました。これから熱い商戦ができるんじゃないかなと思っています。こんな予算が付いたものというのは、サッシやって30年で初めてです。是非、自分の家の中で寒いところのある所。例えば浴室、トイレ、脱衣室、そんなところに5万ポイント付けると、大体1そうか2そうやってしまうと5万ポイントいっちゃうんですけども、それを付けると三分の一くらいの予算で出来ますので、是非この際ですからやってみてはいかがでしょう。自分の会社のコマーシャルでした。よろしく願います。

## 石川格子会員



皆さん、こんばんは。石川です。最近新聞に掲載いろいろとさせていただきまして、その内容は外務省のほうで毎年盛大に取り上げられている、今年で第6回目になりました「WAW!」という国際女性会議というもので取り上げられていたいておりました。女性が活躍する中でいろいろ問題が細かくあるんですけども、国によっても抱えている問題も違いますし、それぞれの人生ステージですとか、立場によっても抱えている問題が違うということで、国際的に共有をしながら問題解決に取り組んでいこうと、安倍さんが首相の時に始まった取り組みということで今も続いているそうです。今年は、そのパネルディスカッションのパネラーの一人の方で、いつもは東京都から選ばれることが多いんですが、福島県内から「株式会社クリフ」の石山さんという方が選ばれ、その方と一緒にいろいろ活動してるということで、今回は白河のほうではそのサイドイベントということで開催させていただきました。福島県内の各地の女性経営者の方を呼んでいろいろ課題についてお話をしたということで、ちょうど今いらっしゃる白河市長にも出席していただいて、いろいろ情報を交換させていただいたということで、是非新聞の記事などご覧になる機会がありましたら読んでいただけると幸いです。

## ■白河市長新年卓話

## 鈴木和夫様



皆様、おばんでございます。今日は、久しぶりに西ロータリークラブの新年会にお邪魔をいたしました。西ロータリークラブの方々も随分会員が増えたなあと、以前と比べると随分増えたなというふうに思いますし、中間どころのごそつと入って来て、大変活気のあるようなロータリーだなと感じました。今、石川さんからちょうどタイミングよく入場してきたら、この前の先週の日曜日に女性経営者会議福島in白河という会議ありまして、石川さんはじめ県内の女性経営者のそうそうたるメンバーが白河に集まれて、森まさこ先生のご発案なのかな。その前に、世界のトップリーダーの方々が集まったグローバルな会議を受けての福島県版の女性会議ということの白河版と、こういうことでありましたが、その中でもいろんな問題がありましたが、女性が生き生きと働ける社会をどう作りたいのかということ。いずれの方も女性経営者でありますから、当然経営者としての視点でまだまだ女性ならではの視点で、社会の変化の中で女性の活躍というと今更という感じもしますけど。女性が然るべき地位に立って、本来持っている能力を発揮できるようなそういうような社会を、あるいは会社にしていくにはどうすればいいのかと。そういう事を各人の社長さん、あるいは副社長さんからお話を聞いて、大変自分としても思っていた事ではありましたが、改めてそういう話をお伺いするとまさしくそのとおりだなというふうに思うのであります。今日は、ちょうど先週いっぱいかけて当初予算、来年度のですね。当初予算の市長査定を終えまして概要が固まりましたので、その辺も含めて30分ありますのでそんな時間ありませんので、どういうところに気を使ったかと。あるいは、どういうところに配慮をしていったかと。あるいは、どういうところに白河のあるいは福島、白河だけでなく地方都市の抱える問題があるかということについて職員の方と色々な議論をいたしました。その辺のことを申し上げたいと思います。今、国会では岸田首相が異次元の子

育てということを提唱されて、様々な議論を野党の方々と、あるいは与党の方々と予算委員会の中で質疑を継続中ではありますが。これは異次元であろうが何次元であろうが、当然もう20年前30年前から想定されていたことでありますが、それがここに来てコロナのせいもあるんでしょうけど、出生率がもう80万人を切ったと人口問題研究所では5年以上早く、他所よりも早くですね。人口減が顕在化してきたので、ここで大慌てではないわけですが、急遽こういう策を出してきたんだろうと思います。実は、これは静かなる有事という方もいるんですね。防衛、軍事、こういう国際的な紛争が目に見える有事であれば、目に見えない静かなる有事だというふうに申し上げて過言でないと思いますし、むしろこちらのほうが怖いだろうと。戦争ももちろん大変な問題ではありますが、しかし10年20年かかった戦争も中世にはありますが、近代戦争で10年も15年もかかった戦争はないわけで、数年で終わりますけど。この静かなる有事を、この少子化という問題を解決していくには数十年かかるわけですね。ですから、数十年の戦争だと。戦争という言葉を使うのは妥当かどうかは別として、数十年で考えなきゃならない問題だというふうに考えると、まさしく一番大きな問題は私はこの問題だろうと思います。もちろん、今の国際状況を考えて時に、今は防衛力、防衛予算をGDPの2%まで引き上げると。これも大変な問題ですね。これも引き上げれば、世界第3位の軍事大国になるわけですね。ですから、軍事費の面については倍上げれば相当の額になるわけですが、これはさておいてこの子育ての問題に絞って見てみると、本当に静かなる有事で、これが続くと大変なことになるというのは、皆さんご案内のとおりですけど。日々、私も商売柄新聞見ますけど、本当にこう毎日毎日いろんな方の死亡告知が出てきますね。一方生まれる方は、その半分とかその三分の一ですから、どうもこれはどこの自治体もそうですけど人口減は避けられないことであります。東京なんかもう出生率が一番低いくらいで。あと10年15年すれば、東京が高齢化問題の一番深刻な問題を抱えるであろうと言われていたわけですが、人口が一千万人以上いるのでさほどそれは目には見えませんが、数字上は統計上は東京都が一番危ないというふうに言われてるくらいでありますし。むしろ、地方の小さい町、村に、分母が小さいので10人とか15人集まれば、人口増加率が増えたというふうになるので、分母が違うから全然それは比べても意味がないという議論もありますけど。人口6千とか7千とか1万とか、そういう所に例えば20人とか30人集まれば相当の規模が集まったと、こういうふうになるわけですが、実際に集まっている例もこれあるわけですが、それは子供を産むということ、あるいは子供を連れてこちらに来るということがあります。この問題は二つあって、まず一つにはまず子供を産んでいただくには若い女性が残らなきゃならないわけですね。でなければ、生まれようがないので。じゃあ、若い女

性の動向をどういうふうに見るかということ、これは新聞にも出てましたけど、福島県は残念ながら東京に出ていく割合が全国で3番目に多いんですよ。トップは広島県なんです。首相のお膝元の広島県が一番多いんですけど、その次が福島県が東京に出ていく割合が多いんですよ、3番目に。ただ、移住希望者は福島県がこれ3番目に高いんですよ。移住するならどこを選んだらということ、福島県がトップ3に入ってるわけですよ。しかし、実際出ていく若者の数を見るとワースト3が福島県なんです。この問題をどう考えるかということなんです。若い女性が残るためにはどうするかということ、当然働き口が必要ですね。働き口が必要だと、じゃあ女性はどのような働き口が必要なんだろうということ、私特別こういうものがあれば女性が集まるという職種はそんなに、まあサービス業なんかもっとあってもいいと思いますが、基本的にこの県南というのは製造業の強い地域です。圧倒的に製造業強いんです。これは、県南でも福島県内でも一人当たりで計算した工業品出荷額というデータがありますが、工業品出荷額でも1位か2位ですよ、白河は人口規模で。当然、白河の人口規模での工業出荷額はいわきとか郡山に比べても遜色ないトップクラスですね。製造業は強いんですけど、製造業は男の仕事というようなイメージがありますよね、どこかしら。実際はそうではないですよ。オリンパスなんか行くと、女性の方が沢山おられて最終のチェックは全部女性の方です、ほとんど。立ち仕事ですけど、女性の方が多いんですよ。決してそんなことはないんですけど、イメージですね。製造業の強いというイメージ。ですから、女性の出番があまりないという、そういうイメージが定着してるのではないかと。それからこの前も女性会議でも私も話をいたしましたけど、今いろんな女性の方々が活躍できる為のいろんな法制度。女性活躍推進法とか男女雇用機会均等法とか、いろんな制度ができております。できておりますが、しかし箱を作ったところで中身に入るものいざ問題なわけですよ。箱を作った。しかし、中に入るものが空虚であれば意味がないわけでありまして、実はそこが問題で制度は作って女性が働きやすいような制度は、これは一種のスローガンのなものでありますけど。そういうものは相当国も呼び掛けるし、我々自治体も呼び掛けております。ただ実際の状況を見ると、例えば経営者の方沢山おりますけど、例えば女性が育休を取るの当たり前ですけど、じゃあ男子はどうかということ男子は取っていいですよというふうになっているでしょう、制度上は。ただ実際、取るというと何となく取りづらい。そういう目に見えない圧力というのはないでしょうか。これが問題の一つでもあろうと思います。私は市職員にも育休をどんどん取りなさいと、男性も取りなさいと。取った分だけ、もちろんその分だけ穴が開きますから大変ですけど、それは組織で全部でカバーするから休みなさいと。もう子供を産むことは仕事をする以上にある意味大事な事だから、男



性も育休を取って育児に参加しなさいということを上げておりますが、これですら本当はまだ少数です。この前、一年取った男性がおりましたが、これは勇気ある行動ですよ。だんだんそれに続いて、2週間とか3週間とか取る男性も増えてきました。こういった事を、やっぱり企業の皆様とか雇用者がそのことについて取りやすいような雰囲気、経営者だけじゃなくて社風として、会社の雰囲気としてそういったものを醸しだしていくこと。これは非常に大事な事。これは目に見えない壁なんです。目に見えない障壁なんです。制度上は障壁を取り払ったとしても、目に見えない壁というのは必ずあるので、そのところをどうするかということだと思います。これはいくら政府が旗を振っても、自治体が旗を振ってもそれは出来ないと思います。それはやはりまさしくその会社のトップ、あるいは中間管理職の方々、あるいは社員全部がそういう考え方を持たないとこれは出来ないと思います。そういったこと。そして、毎日毎日長時間労働をすれば、当然男性は家に帰って育児に参加することは出来ないわけですから、協力長時間労働は避けていく。これは方程式でいえばそのとおり。ただ、実際はそうはいかないですよ。やっぱり仕事が忙しいので、超勤をやらざるを得ない。あるいは、夜間勤務に行かざるを得ないという実態もありますので、そこをどういうふうに折り合いをつけるかということなんでしょう。まずそのところを女性の方が働きながら仕事をしていくという環境を制度的な問題じゃなくて、この心理的な問題を含めて、雰囲気問題も含めて考えていくことが非常に大事な事だと思います。それから、その女性の方が東京に行って、男性の方は比較的戻ってくる。ただ、女性の方は戻ってこないというのは、今言ったように働き口が製造業が圧倒的に多いので、私らの仕事じゃないわねと、のではないような気がするというようなこともあるのではないかと私思うんですよ。ですから、もっとサービス業のようなものももっとなければ、なかなか女性の方は帰ってきにくいのではないかと、それからこの前の女性会議でもありましたけど、ロンドンで仕事していた女性の方はロンドン辺りだともう白い人も黒い人も、それから性同一障害の方も同性愛の方もいっぱいいますよね。ですから、なんらそういうものについては特別な意識を持たなくて済むという世界で生きてきた人が、当然日本に来たら女性経営者なのかよ、そしたらいつ結婚するんだよとか、結婚したら今度いつ子供が生まれるんだよとかって、そういう事を言われる。向こうではそういう事はあんまり言わないそうです。ですから、何となくそういったものが女性に対して、言ってるほうは別に特段そういう意識はないんですよ。ただ、言われてるほうは何となくプレッシャーを感じるということは、私もそうだろうなと思います。なので、結婚することが当たり前。子供を持つことが当たり前ということの中でそう言われると、まだ結婚されてない人は何となくプレッシャーを感じる。あるいは、子供をまだ持っていない人はプレッシャーに感じると。こういう事があって、生きづらいとか仕事がしづらいとか、そういう環境も私はあるのではないかと、そういうふうに思うんですよ。ですから、ジェンダーギャップという表現がありますが、日本は本当に低いんですよ。この前の新聞かなんかだと、140何位中113位か114位だったですかね。このぐらい率は低いんですよ。男尊女卑ということなんか、今誰も思ってる人は誰もいませんし、そんなことを言う人もいませんけど。昔、私が小さい頃はお父さんはよこぎに座って、母親はすぐそこに座って、母親はお風呂が一番最後に入ると、こういう生活でした。昔は。農家なんか特にはね。それは男尊女卑というのかど

うかわかりませんがそれが当たり前でしたので、それがずっと知らないうちにその人間の意識の中に植え付けられたのかもしれませんが。決して男尊女卑という考え方を私ら持つてわけじゃなくて、役割として女性はこういうもの、男性はこういうものというふうに、どこかで決め付けているところがあるのじゃないか。男性は表で働く、女性は家で子供を育てながら家庭を守るということ。ですから、今税制で見ると配偶者控除ってありますよね。あれもなくそうという議論があります。今、ほとんどの人が働いているにも関わらず、依然として配偶者控除があるというのはどういう事なんだろうと。そもそも配偶者控除、これは税の問題ですけど。そもそも男は外で、女性は家でというのは、別に昔からあるわけじゃなくて、振り返れば大体日本の大正時代あたりに、明治の時期が終わって大正あたりに入って日本の重工業が非常に発達をしてきて、そこにやはり中間管理職と言われている中間層と言われている、例えば公務員であるとか、大手企業の課長さんとか部長さんとか、そういった層が出てきました。東京とか大阪とかいう大都市とか中枢都市に、そういう職種が出てきたわけですよ。いわゆるサラリーマンという俸給生活者という言葉が出てきたのは、大正の頃ですよ。その頃から男は当然会社員ですよ。あるいは公務員、こういった方々の中で男性は表で働いて、女性は家で子供を育てながら家事をするという役割分担が決まってきたということが、ずっと戦後も続いてきてるわけですから、配偶者控除という制度ができてるわけです。ですから、今や全く社会の構造が違ってきて、もちろん専業主婦も立派な仕事ですよ。立派な業務だし、立派な役割を持っていますけど、同時に社会に出ていく女性がいるわけですから、むしろこちらのほうがおそらく率にすれば多いでしょう。そうすると、配偶者控除という税の制度自体がもう意味がなさないんじゃないかと。むしろ働いてる者にとってはそっちの方が不利なんじゃないかと。こういうふうな議論も出てきているわけでありませう。ですから、社会と共に税も変わってくるし、社会が変わるから税も変わってくるわけですから、これはもう配偶者控除もいずれ私は消えていくだろうというふうに思いますが。女性が働くのはもう当たり前の社会になってきます。また、働いていただかないと社会のこういう言い方するとどうかですが、働き手がもうないです。圧倒的に少ないですよ。もう一千万人くらい減ってるわけですよ、完全に。これがもっと一千万単位で10年20年減っていきますよね。ですから、幸い日本は戦後我々はベビーブームの最後の頃ですけど、人口ボーナスというふうに言われてた時期があって、昭和22年から24~25年の頃の団塊の層が圧倒的な数として労働力を提供してたわけですよ。ある者は中学卒業して集団就職列車なんていう言葉、皆さん若い人はわかんないでしょうけど、集団就職列車で青森から来る列車に乗って東京、あるいは大阪、あるいは名古屋に出たわけですよ。この数が圧倒的なわけですよ。ですから、労働力はどんどんどんどん増えていったんですよ。これは人口のボーナスというふうに言われてるわけです。そして、比較的戦後冷戦の中で冷戦期の安定というふうに言われてますが、米ソがお互いの勢力圏を分け合いながら、お互いにある意味での平和を実現してきたこともあって、日本は経済的なものに力を入れていけばよかったと、いろいろな意味で幸いだったという時代を過ごしてきたわけですよ。ここに来て、この人口のボーナスどころか、人口のマイナスボーナスになってきたということ。そして、気が付いたらもう日本のかつての半導体なんか、1980年代は日本トップですからね。あまり日本が強すぎるから、アメリカが日本の半導体規制をかけたわけですよ。

そのうち今度、日本に規制かけられたので日本は半導体産業弱ってきてるうちに、今度はアメリカがぐんぐん半導体に力を入れてきて、今、半導体ではアメリカと中国、韓国とこうなってきたわけでしょ、あるいは台湾と。日本は後塵を拝して、今やもう途上国ですね、もう一介の。ただもう一回、再浮上しようとしてますが、でもそれはあくまでもアメリカとの戦略の中で再浮上してるのに過ぎないので。かつての、ジャパン・アズ・ナンバーワンという半導体の世界シェアの圧倒的シェアを誇ってた日本があつという間に凋落してきたということでありますが、そのくらい当時は勢いがあった。それは人的にも勢いがあったし、企業も自ら研究開発に思い切った投資をしてきました。すべてがいい歯車で回ってきた。人は働き手がいる。そして、企業も研究開発資金として投じてきた。政府もそれを税制面で後押しをしてきた。これは見事な成功体験になってきたわけですが、それがアメリカに叩かれはじめる。半導体なんかも縮小し始まってきた。アメリカというのはしたたかな国で、そうやって日本を叩きながら陰ではもう一回半導体用の力を増そうとしてきてるわけで、それで見事に復活してきたわけですよ。日本はそれにばらばらに乗っかっちゃって、半導体がいつの間にかこう凋落してきちゃったと。こういう事だと思いますが、非常に幸いな時代を過ごしてきた。今度、平成に入って途端に今度は世界の状況が変わって、資本市場に中国も入ってくる。ロシアも共産主義を廃止して資本主義世界に入ってくるということ、土俵が大きくなってきて日本とヨーロッパとアメリカだけが競争してる社会に中国が入りロシアが入ってくるとなれば、今までの日本の優勢は失われてくるということに加えて、今までやってきたものがみんな悪いんだみたいな、我々日本人の欠点というのはある意味ではすぐに舞い上がってしまうし、ある意味叩かれると今までの事がみんな悪いように感じるというか、過剰なる自信とまた大いなる悲観と、この両方が同居しているのが我々日本人だと言われてますが、ある意味ではジャパン・アズ・ナンバーワン。アメリカの名門のホテルまでも買ってしまうほどの勢いだった国が、今後バブルで叩かれると今までの日本のやり方はすべて悪いんだと。アメリカにならえばいいんだというふうになってしまって、その公式も失敗して上手くいなくて、今漂流してるという状態で。いろんな事をやってきましたけど、そこで岸田さんが新しい資本主義と。分配と生産の好循環と。これも間違いないですよ。このことおりのことなんだと思います。ですが、それをどういうふうを実現するかこれからの実行力にかかってくると思いますが、その一翼を担うのが女性だと思います。そして、この話にかえりますとその女性が地方に残らない原因の一つに、私は産業の在り方というものと、それから社会の女性を見る視点視線。そして、目に見えない壁を女性は感ずるんだと思うんですね。男性は感じてなくても、女性がおそらく目に見えない壁を感じてるんだと思うんです。若い女性ほど、おそらく。なので、ここを出たいと。東京に行って、もっと自由な事したいと。将来帰ってくるという意識があるか私わかりませんが、男性の場合にはある程度お前は家を継ぐんだぞと、こういうふうに言われたりすると、どこかに頭に入ってやっばり家を継ぐために帰ってこようという割合がある程度増えてますが、女性の場合はなかなかそういう優先というもの働かないので、なかなか帰ってこない人が多いですね。これどういうふうにして帰って来ていただくかということが非常に大事な事。もう一つは、これもそうですけどやはりもうこの社会減が大きいですから、人口減るのは当たり前ですけど、そこで今言われているのは、都会に東京に圧倒的に集

中してる人口を、人口はどんどん減っていく中でもやっばり東京一都三県に集まってる人口が三千万くらいいるわけですよ。これはいびつ過ぎますよね。この人口を地方に分散させるということになるわけですよ。じゃあ、その分散する理由は何だというと、いろんな理由があるわけですよ。今度のコロナのような過密であるがゆえに、大都市にこういった疫病が蔓延しやすいということと。あるいは、関東大震災ちょうど100年前ですけど、関東大震災の記憶は誰もありませんけど、3.11の記憶は我々はまだ明確に持ってますよね。去年の3月も地震がありました。そういった意味でいうと、我々この災害に備えるというのは国民共通の言葉、共通のスローガンになってます。そういう意味で災害は必ず東京では起きるということは、もうこれは異論ないところで。いつ起きるかはわかりませんが、異論がないところですね。そうすると、やっぱりその生物学的な本能として、やっぱり東京は危ないから地方にできれば行きたいということ。そういう人もいます。あるいは、子育てをする時に東京の有名な開成高校とか慶応の幼稚舎とかに入りたいという子は残るでしょうけど、そうでない人たちもいるわけですよ。地方でゆったりとした環境の中で子供を育てたいという人も相当多いわけです。こういった人たちが地方に行こうという時に、そういう人もいます、地方に行く。それから、東京にいるリスクを感じるから地方に行くという方々と、逆に東京で子育てするよりは地方のほうがはるかに子育てしやすい。生活も物価も東京よりはるかに安い。そしてまた、人間関係は地方も希薄になってるとはいえ、東京、大都市よりはまだ人間関係の温もりは残っていると。そういう事を求めて地方に来るとい人も多分いるわけですね。これいろんな動機付けがあるわけです。こういった方々を我々がどうやって受け入れるかということが、実は問題なわけです。一つだけ要件を満たせば来るというならば、何の問題もないわけですけど、いろんな方々が地方に来る動機付けがあるわけですね。幸いにして、これはコロナでは大変な私ら不幸な目に遭いましたが、逆に言うとその前からその傾向あるわけですけど、今リモートワーク、インターネットの発達によってもリモートワークができるようになりました。これはコロナの前からもうできてるわけですけど、このコロナによって東京にいなくても仕事ができるという環境ができてきた。これは実は大きな要素の一つなんです。家でテレワークしながら往復2時間3時間かけてた通勤時間を仕事に充てられると。家族と一緒に過ごせるというメリットもあるので、もう別に東京にいなくてもいいわねと。こういう考え方があって、地方に移り始まったとこういうふうにする学者もいます。私は疑問ですけど、まだね。ただ、これは間違いなくそれが大きな動機付けになってると思いますけど、そういう方々が東京から地方に分散し始めるということで。じゃあ、我々は何を用意すればいいんだらうかと。ただ、東京みたいなああい一流デパートとか一流劇場だとかショッピングだとか、こんなことは出来るわけじゃなくて、そんなことを望んでいる人は東京から脱出しないわけですよ。こんなことは希望してないわけです。おそらくいろんな方がおりますけど、最低限この白河なら白河で仕事が出来ると。リモートワークが出来るといこと。そして、ここでだったら子育てがしやすいねと、そういう環境を整えるということ。あるいは仕事が終わった後、いろんなスポーツサークルもあれば、あるいは演劇サークルもあれば、いろんなサークルに入ってアフターファイブの時間を有意義に過ごしていくと。こういう事を考え、そういう事を希望して地方に移る方もいると思います。様々な方がいるので、何に力を入れていけばその地方

に集まってくるのかというのは答えは見えないわけですね。それぞれにみんな苦労してます。ある町は、子供一人生まれれば100万くれるとか。あるいは、家賃を半分にするとか。それで集まってる団体もあります。いろんな取り組みをしておりますが、これは私は答えはなかなかないと思いますね。よく今度の予算の中でも、いろんな子育ての中で現金を配る。これは現金給付、現金支給と言うんですけど、それから現物支給というのがあって、これは保育園を拡充するとか幼稚園を拡充する。あるいは、その保育園の保育時間を延長する。あるいは、放課後児童クラブで両親共稼ぎなので、家に帰っても誰もいないから授業終わった後、一定時間過ごす放課後児童クラブというのあるんですけど、こういう所にもっときめの細かい策を講じて、第二の学校にするということによってですね、悪く言えば家に帰るまでの間、一定の箱に入れておいて何も事故がなければそれでいいわいという類のものではなくて、第二の学校にしてそこで例えば高学年はきっちり勉強する。小さい子は、1年生2年生はワーワー遊ぶと。こういうふうに学年ごとに区分けをしながら、学校に準ずるような施設、機能を持ったようにする。こういったものなんかは実は必要なんじゃないかと。これは現物支給と言いますが、どちらを取るかということもあるんですね。わかりやすいのは現金を支給することは一番わかりやすいです。ただ、現金支給って一回限りですよ。白河では今、すすく赤ちゃんクーポン券とって、0歳から3歳児まで毎年3万位おむつ代とかなかで与えています。今度、政府が0歳児に10万くれるというので、0歳児に3万渡る必要ないのでそれは撤廃しますが、その代わり中学校の入学時にお金かかるというので、それに5万を提供しましょうというふうにしましたが、それだけで子供が生まれるわけじゃなくて、それからくる話じゃないと私は思うわけですよ。やっぱり、現金支給と現物支給とこの両方のミックスだと思います。そして、特に現物支給で授業終わった後どういうふうに過ごすかと、こういう事にもっと力を入れるべきじゃないのかと、今度いろいろ試行錯誤しながらその両方についてみよう。現物支給ってすぐに目に見えるものじゃないんですけど、そういう事がある程度の数年かけながら、授業終わった後の子供たちに質、量とも十分な第二の教室にするにはどうしたらよいか。指導員がいないんです、まずね。ですから、先生の免許を持った方々にもう一回再登場してもらおうか。あるいは、民間の塾の経験者なんかの方々に、何とかそういうお手伝いが出来ないかとか。そういう事をしながら、そういう現物支給、そういう子供児童クラブのようなものを充実していきたいと、こう思うんですね。いろんな問題があります。しかし、やっぱり絶対に人口減は避けられないです。誰やったって人口は減です。これはもう生む人の数が少ないですから。生む人の数が一人昔みたいに8人も9人も生んでくれればいいけど、そんな事はありえないでしょ。せいぜいいても3人ですよ。教育費もかかるし、そんなに多くは生めないですよ、自分も仕事をしてれば。うちの婆ちゃんとか、おふくろの婆さんも親父の婆さんも9人も10人も生んだんですけど、これは昔の話です。今は全く状況が違うので、そんなに生めない。とすれば、当然人口は減るわけですから。減った中でどういう地域社会を作っていくのかという事が問われてるわけです。それは、まず第一に我々が住んでいる白河に、まあこの地域もそうですけど、そこからなるべくそこで仕事をしてもらう。一旦出て行っても、できれば帰って来てもらって仕事に就くということがどうできるかというのと、東京に過剰に集まった人口を地方に分散させるということ。それは政府の後押しもありますが、その個人個人の

生観の問題もありますから、そういう東京で生活しなくても、十分に地方で生活していけるし、したいという方々のために我々が何が出来るかということを真剣に考える時期だというふうに思います。白河は非常に条件がいいと誰しもが仰います。県庁の方も国の方も皆さん仰います。ただ、より条件がいいなら栃木のほうがより条件がいいですよ。茨城のほうが条件がいいですよ。これは、東京からの近さという意味ですよ。条件がいいというのは。やはり、テレワークになったとしてもやっぱり東京の本社に行くのは当然で。NTTでも本社勤務やめたと行って、もう新幹線代も飛行機代も出すと言ってますが、あれがどのくらい定着するか私はわかりません。コロナが今、収まりつつあったらテレワークはもうむしろ減って来てますものね、今ね。やっぱり、人が集まらなきゃ駄目だということでまたテレワークが少し減って来て、やっぱり本社に集まってワイワイガガヤという時間を持たないと会社員としての一体性が損なわれる。組織の一体性が損なわれるというので、また逆流現象。これ逆流現象と言っていいかわかりませんが。テレワークが主流になりかけてた社会が、またやっぱりこの社会が変わりつつあると。多分、いきつまわりつつしながらなんだと思いますけど。いずれにしても、我々地方が地方として生き残っていくための条件として、やはり東京が圧倒的にまだ力があるでしょう。どうせなら、東京との距離感からいけば福島県では一番白河がいいというふうに誰もが言っています。ただ、いいというならば那須塩原のほうがいいわけですよ。あるいは小山のほうがなお近いわけですよ。あるいは、宇都宮もなお近いわけですよ。そういうふうにと考えたら、単に東京からの近さという点で福島県では優位ですけど、全国で見たらもっとも静岡の熱海だって近いよねということになれば東京からの近さだけじゃなくて、そこに福島県では近いけど他の県との比較においては必ずしも圧倒的優位性はないわけですから。そこに白河ならではの付加価値を付けていくということなんだろうと思いますね。そこを私は文化、あるいはスポーツ、あるいは人間関係とか、こういうものだと思いますね。もちろん、企業も大事ですよ。もちろん、企業が産業力があるって話ですから、産業力の事は今日は取って置かなくても、私は産業は地域振興の要とずっと市長になってから言ってますから。もういろんな企業が白河には集まってますし、誘致も決まりましたし、造成始まります。この3月4月、今年度の春から造成始まって、来年の春から工事着工始まりますけど、いろんな企業が集まっています。ですから、働く場所がないことはないです。ただ問題は、女性が働ける働きやすいような場所と、それからサービス業が少ないのが残念だなと思ってますので、その辺も加味しながら産業振興やっていきますが、その上の問題です。上の問題として、スポーツとか文化とか、それから居場所とよく言いますね。居場所、こういう所が必要。よくサードプレイスって言うんですね。家、職場、それ以外の場所、これが実は必要なんだと。それが皆さん居酒屋であったりするわけですよ。男性だったら仕事終わって家帰るまでの間、ちょっと一杯ひっかけ、これやっぱりサードプレイスですね。じゃ、女性はどうかと。女性のサードプレイスはどこなんたろうと。女性のサードプレイスはどこなんたろうと。なかなかないですよ、これがね。ママ友が集まっているいろんな会話を。そういう所がサードプレイスなのかもしれませんけど。こういったものは地方のほうができやすいというふうに言われてるので、そういう環境を我々が作っていききたいというふうに思いますし、そしてあまり人に過剰な関与をしない。外国人がいても労働人だみたいな顔をしない。ごく普通に外国人がいる。昨日、ある企業で

は、同じような会社が集まって11年間94回研究会続けてます。この方、その会社の中にはベトナム人の方なんかいっぱいいる会社があるんですけど、もう普通に扱ってるんですよ。普通に扱ってる。特別仕様も何もしない。ですから、我々はそういう外国人であれ、女性であれ、あるいは障がい者であれ、全くそんな普通目で見ればいいと思うんですね。よく社会の多様性とこう言いますが、多様性というのはそういう事で、いろんな人がいていろんな性格の人がいていいというのが社会なんだろうと思うんですね。ですから、そういうふうにある意味おおらかな寛容性のある社会になってくると、私は人は集まってくるというふうに思いますね。寛容性がちょっと足りないんじゃないかと、これはマスコミの方、今日いるかどうか分かりませんが、マスコミの方もそうで良い意味での寛容性が必要で、人を批判するのは簡単ですけど、人間完璧な人なんか誰もいないので、批判するなら肝心なところを批判したらいい。政治家だったら本来成すべくことをしないでというところを批判するならいいけど、まあ大した事でないことを批判して足を引っ張って何の得があるんだろうということも含めて、やはり人が集まりやすいような、そして意識させないような、そういう雰囲気のある社会。そういったものを我々は目指していきたいというふうに思っております。これは、行政では到底できないことであります。社会の雰囲気を作るのは行政ではありません。これはやっぱり、生きている我々、市民が醸し出す雰囲気です。特に安定した生活をしてらっしゃる方々が、その国のお国柄を出すというふうに言われております。俗に、中間層の人たちがそのお国柄を出すというふうに言われてます。ですから、日本の良さというのはやっぱり我々地方に住んでいて、それなりの生活を送っている人たちが作っていくんだろうというふうに思うんですね。そういう意味で、我々もう一度日本の良さを過剰にそれを自慢する必要もないし、また過剰に悲観する必要もない。だから中庸、ほどほどのバランス感覚を持ちながら自分自身を等身大の自分を見ていくということがこれから必要なんだろうというふうに思っております。ちょっと時間もオーバーしましたので、まあそんなことをしながら当初予算の査定の中でいろいろな議論をいたしました。これからは白河は私は組長だから言うわけじゃなくて、これは二日前も中央テレビの社長さんがお見えになって、福島中央テレビに。いろんな方がお見えになります。新年、年始、年末、やっぱり皆さん異口同音に仰るのは、本当に白河というのは非常にいろんな面で恵まれていると。非常に恵まれていると。産業力も文化力も、ただ惜しむべきはもうちょっと発信力があつたらいいね。あるいは、いい意味でのもうちょっと押しが強かったらいいねという方が多いですね。ですから、ここはもったいないねというふうに言われれば、そのとおりだと思いますが、その良さを出していくと。良さを出していくということも含めて、私は先頭になってこれからは白河のセールスマンとして、PRマンとして頑張っていこうと思っております。それだけの良いものを持っているものを良いと評価してもらえるような、そういう白河に是非ともしていきたいというふうに思っておりますので、西ロータリークラブの皆様方におかれましても、白河の良さを再度認識し、また弱さもあります。この弱さもそれも十分にやっぱり見つめつつ良さを出してって、そして弱さをカバーしていくということをとおしながら、白河の魅力をも更に磨いていきたいと。共に一緒に磨いていただければ幸いだというふうに思っております。ほんの短い卓話ではありましたが、思うところの一旦をお話を申し上げました。ありがとうございました。

## ■本日のプログラム

### 新年会

#### ○会長挨拶



#### 高島裕会長

鈴木市長、素晴らしいお話、本当にありがとうございました。公務もお忙しい中、感謝申し上げたいと思います。また、今日は市長がおいでになるということ出席率が非常に高いということで、なるべく多く市長にお声がけをして、これから参加していただければなと思っております。どうぞよろしくお祈りします。またこの後、新年会という懇親会になるわけですが、一点皆様のほうにお願いとかお話をさせていただければと思います。今年は、市長におかれましても市議会のほうにおいても、選挙という年でございます。今現在、市長におかれましては進退のほう別に表明しておりませんので、その辺は時期尚早ということですので、市長と色々なお話をされる中で、その辺の話だけはまだしないで楽しみにしていただければなというふうに思いますので、どうぞ皆さん興味津々でお待ちいただければと思います。ということで、この後そろそろ美味しい冷えたビールも来ておりますので、挨拶はこの辺にさせていただきます。今日、市長さんも時間の許す限り皆さんと懇親を深めていただけると思っておりますので、どうぞよろしくお祈りしたいと思っております。本日はお世話になります。よろしくお祈りします。

#### ○乾杯

#### 鈴木孝幸直前会長

皆さん、こんばんは。改めまして、今日新年会ということで、2月に入ってしまったが、新年あけましておめでとうございます。そして白河市長様。今年はロータリークラブ三団体の合同新年会ではなく、我々西ロータリークラブだけの為に来ていただきまして、このような素晴らしい卓話いただきまして大変ありがとうございました。そして、入会前提で今日来られている「長板金」の社長の長さん。今日はどうもありがとうございました。市長も来られた新年会ということで、いいタイミングなのかなと思っております。2023年、1か月過ぎてしまいましたが、振り返りますとこの3年間、本当にひどい3年間だったと思っております。今年は是非是非右肩上がりで兎の跳躍のように、我々の仕事も、そしてこのロータリーの活動も、そしてこの白河地域もですね、右肩上がりで飛躍的に伸びますように。先程言いました市長のお話の中で出席率もですね、できれば右肩上がりで上がっていくように。そして半導体産業等、日本の産業が右肩上がりであれば伸びていくことを祈念いたしまして、右肩上がりの乾杯というものをちょっとやりたいと思っております。方法はいたって簡単でございます。わたくしが皆さんご唱和願いますと言いましたら、乾杯の時に右肩を意識的にこう上げてもらうだけでございます。それでは、皆さんご準備はよろしいでしょうか。この地域すべてが右肩上がりに発展しますことを祈念いたしまして乾杯いたします。乾杯。お付き合い、ありがとうございました。

